



TITLE:

<雑叢>元代の條畫をめぐる滋賀秀三氏との意見の交換と展望

AUTHOR(S):

植松, 正

CITATION:

植松, 正. <雑叢>元代の條畫をめぐる滋賀秀三氏との意見の交換と展望.
東洋史研究 1980, 38(4): 675-682

ISSUE DATE:

1980-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153757>

RIGHT:

元代の條畫をめぐる

滋賀秀三氏との意見の交換と展望

植松 正

昨年（一九七八）十月から、私は「元代條畫考」と題して、元代に數多く發せられた一種の法令である聖旨條畫の集成を、『香川大學教育學部研究報告』に連載してきている。諸方に拔刷をお送りして指正を乞うたところ、數々の御教示を頂戴したが、近ごろ、滋賀秀三氏から長文にわたる元代の條畫についての鋭い御指摘をいただいた（一九七九年八月三日附書簡）。それは拙稿「元代條畫考」の（一）（二）が出た段階でのことであつた。氏の指摘は直接には條畫という語の解釋に疑問を呈せられたものであるが、一讀のもと、それは當面進めつつある集成作業の方針そのものにかかわつて、私にとってきわめて重要な點にも及んでいると感ぜられた。私はさっそく返信をしたためて感謝の意を表するとともに、氏の指摘のいくらかは當らないむね反論を試みた（一九七九年八月十四日附書簡）。それに對して、氏からは拙稿の今後に期待すると御返事をいただいたが、もとよりそれで私がかかえている問題が解決してしまつたわけではない。結論を將來にもちこさざるをえない點もあるように思われる。

本稿は、二つの書簡の公開とそれについてのコメントという、本

誌にとつてはいささか異例の形をとるが、これはひとえに島田虔次氏の懇切な後援と滋賀秀三氏の好意ある承諾とによつて實現したものである。但し、本稿全體の責任はあけて筆者一人が負うものであることはいうまでもない。

なお引用する書簡については、儀禮的なところや私事にわたる部分を削除して、内容の實質に關わる部分を主とし、また本誌掲載に際して一部言葉遣いを改めたところがある。

一

まず滋賀氏の書簡は左の如くである。

貴著「元代條畫考」(一)(二)別刷惠贈にあずかり、厚く御禮申上げます。さきに『東洋史研究』誌上で拜讀した至元新格復原のお仕事に續いて、この度の貴著の現われましたことは、法制史を學ぶ者にとって大きな喜びであります。

此度の御論文を拜見して一つだけ基本的に氣になりましたのは、「條畫」というものが果して何か特定の立法形式を意味するところの、いうなれば一つの固有名詞であつたかどうか、という疑問を感ずることです。「條畫」とは要するに、簡條書き規定でないし、簡條書き部分^(一)という普通名詞のように、從來漠然と理解しておりましたところに、「條畫と認定した根據」(一四六頁)等を問題とする貴著に接して、戸惑つた次第です。

それを確かめたために、典章・通制兩書を頻りにあれこれひっくり返しながら貴著の論旨を検討し、思ひぬ時間を取りました。それを通じて、貴著が如何に周到なデータ集めの準備の上に成立っているかを知つて敬服致しますとともに、わたくしとして

は暫く離れていた元代法制に非常に新鮮な興味をかきたてられ、そして如何にまだ解っていない所が多いかを感じ、一つの興奮を覚えました。

疑問については、わたくしとしては、矢張り従来通りの見方を維持したいという考えに落着きました。別紙御披見いただければ幸であります。

元代法源は、單行立法と處分（裁判）の先例から成り、成書としてはそれらを取捨配列した典章・通制等の書があるわけですが、單行立法には小型のものから大型のものまであり、條畫すなわち簡條書き形式のものと云えば、自然、比較的大型の單行立法（その最大のものが至元新格）ということになりましょう。そしてかような大型單行立法の盛行は、恐らく元代の特色であるといつてよいのでありましょう。それが典章等にしれば分斷して収録されているものを一つに集め、かつこれをクロノロジカルに排列するという作業は、確かに極めて有意義なものであり、「元代政治史の動向の中に位置づける」ためには絶対必要な前提であることを感じます。御研究の成果が實つて行くことを待望すること切なるものがあります。

〈別紙〉

條畫とは「簡條書き規定」という意味の普通名詞であるとする根拠

一、條畫の語は皇帝レベルの立法すなわち聖旨條畫だけでなく、中央官廳レベルの立法についても用いられた。分説すれば：

(イ) 貴著(一)四一頁末「中書省奏准條畫内一款」とみえるものは、中書省系の役所に傳達されたであらうし、御史臺系その他に傳

達される條畫もあつたであらう。それは『上司條畫』の語があることから察せられる。」なる行文に疑問が感ぜられる。

疑問の一。中書省が上奏して裁可を得た法規は、中書省系の役所にだけ「傳達された」と考えてよろしいか。如何なる機關からの上奏であれ、ある法規案を皇帝が裁可すれば、それはすなわち帝國の法となり、普遍的な效力を有する、と見るのが（少なくとも清朝の事態から考えると）常識と思われる。もとより法規内容が或る役所の執務について定めるものであったり、法規本文のなかで或る地域にだけ適用を限定していたりすることはあり得る。しかし或る機關の上奏にかかるといふ立法過程上の事由によつて、皇帝立法の效力が形式的に限定されるという現象は、元代においても存在しなかったのではないか。

疑問の二。「上司條畫」を「中書省奏准條畫」と同類のものとして結びつけて解釋して宜しいか。後者は皇帝レベルの立法であるに對して、「上司條畫」は上司の定めた條畫の意、すなわち中央官廳レベルの立法ではあるまいか。

(ロ) 典章一六「打算人吏分例」に、「……連到中書省條畫内一款該『須合勾追赴府……斟酌從實應附』と見えるのは、中書省の定めた條畫の意味に解される。かようなものを漠然と指稱すれば、前掲の「上司條畫」という語になるのではないか。

(ハ) 典章三四「蒙古軍驅條畫」は内容を見ると、中書省の下した簡條書き規定であつて、皇帝の聖旨を承けていない。にも拘らず、元典章編者はこれを「條畫」と稱している。これまじしく「中書省條畫」の一つの見本ではあるまいか。

二、多數の簡條書き規定のうち、或るものは「條畫」という名で呼ぶべきであり、他のものは「條畫」と呼んではならない、という區別があったとは認められない。(その意味は、たとえば、元豐以降宋代を通じて「律」と「敕」という二つの刑法典があった。したがってそこでは、同じく刑罰を定めた條文であつても、或るものは律と呼び他のものは敕と呼ばなくてはならないという區別があつた。「條畫」という語をめぐってはさうな問題は起りようがないのではないか、ということである。)

(i)聖旨の前文のなかで「條畫」という例もあるが(貴著)七八・七九頁等)、すべてではない。むしろその例は少ない。前文で「條畫」と言つても言わなくても、實質に違いがあるわけではない。

(ii)後からそのうちの「一條に言及する時に」……「一條畫内一款」という例が多いが、やはりすべてでない。「中書省欽奉聖旨内一款」(典章二飭官吏)、「詔書内一款」(典章二求直言)等々いうのも、實質的な違いがあるわけではない。

(iii)元典章編者が標目に「條畫」と言う場合もあり言わない場合(むしろその方が多い)もある。例として:

典章三六「禁使臣條畫」と次の「使臣不過三站」の内容を見比べると、實質的な性格の相違は認められない。標目の字面の違いから、一方は條畫であり他方は條畫でないと見て見てもそれは無意味であらう。

三、前記(i)(ii)いずれかの関連において「條畫」(ないし「條格」「條款)」の語が現存資料から發見されるとき、これを「條畫」と「認定」する、というのが貴著の方法論と拜察されるが、それで

は偶然に支配されることになりはすまいか。貴著(八三頁)「ただ問題なのは、明確に條畫とは稱していないことである。」とは、偶然の支配には甘んじられない所から生ずる苦惱の言と見るのは僻目であらうか。

次は私の滋賀氏への返信である。

このたびは身に餘る御鄭重なお手紙を頂戴いたしましたして、誠に有難うございました。何よりも拙稿を克明に、原史料をもつきあわせて讀んでいただきましたこと、感激の至りでございます。先生の御指摘は拙稿の今後にとって大きな問題であり、後に小生の考えを述べさせていただきます、御批判をあおぎたいと存じますが、とにかく意欲を新たに仕事をしてゆきたいと念願いたしております。

まず私の仕事の契機と意圖から書かせていただきます。元典章を政治史料として十分に利用したいと思ひ、元典章中の全ての年時をカードにとつたのはもう十年以上も前のことになりました。それをもととして、近いうちに『元典章年代索引』という小著の刊行を豫定しております。これを作りながら思つたのは、元代の條格・條畫などの法令はとにかく整理しなおさなければならぬ、「唐律と明律の比較論」を超えるためには、元の法律を中間項として設定させることは不可缺ではないかということです。

そのためには、何らかの限定を加えておくことが方法として便利であり、「條畫」はひとつの目安・基準になりうるのではないかと考えたわけです。しかし、それは他の聖旨や中書省など上級官廳の立法(格例とか事理とみえることが多い)の法源としての

重要性を軽く扱おうというわけではありません。簡條書き規定に違いありませんが、それ自體ひとつのスタイルを備えており、條格・條畫は歴史的淵源をもつのではないかと豫測しているのです。ただ、やはりはじめてみるとなか／＼悩みは深いのでして、判別に苦心するものがさま／＼あり、また年時の記載のない條畫があとでそれと判明したりで、すでに補訂の必要があるところもあります。

さて、私はやはり聖旨條畫（聖旨、詔書、詔書條畫、條畫など、通じて用いられることが多いのは御指摘の通りです）と、上級官廳の發する政令とは區別しておきたいと考えます。條格というものが敕の系譜に連なるといふ豫測を捨てることができないのと、形式上の區別があるらしいということからです。

「上司條畫」については脱稿後考えておりましたが、これは上級官廳が引用するとか再確認するとかして下級官廳に下した聖旨條畫の意であると思います。そこにやはり當時の文移ということを念頭におかざるを得ませんので、あのような文言で表現したのですが、中書省だけと極めて限定的に解釋したつもりはなかったのをごさいます。「中書省奏准條畫」と「上司條畫」とを同一に扱おうとするものではないのですが、ここは私の文章のまずさもあると反省しております。今「上司條畫」は「中書省降到條畫」というのに相當するのではないかと考えております。

④ 典章二二戸部卷八・私茶罪例條

⑤ 典章二二戸部卷八・私造酒麴依匿稅例科斷條

⑥ 典章五九工部卷二・禁治拘刷茶船條

などありますが、④⑤については今のところはっきりしたことが

言えませんが。しかし⑥については同文のものが左記にみえます。

⑥ 典章二二戸部卷八・優刷茶戸條

⑥には「又一款」とありますが、その前には「又欽奉聖旨條畫内一款」とありますから、それは同じく「聖旨條畫」の引用と考えられます。

上司條畫としてあらわれる「漢兒人、若有隱藏軍器……」が、聖旨條畫に相當することが判ればよいのですが、不明です。先生が上司條畫に相當すると御指摘の「連到中書省條畫内一款該、須合勾追赴府……斟酌從實應附」は、至元六年二月の「立各道提刑按察司聖旨條畫」（拙稿（二）九六頁、五行目）に相當します。これなども「降到」とすべきところが脱落しているか、そう省略する習慣があったのではないかと考えたいと思います。

「蒙古軍驅條畫」の條を指摘されて、先生が相當に元典章を検討されたことがよくわかりました。これは私も氣がついていて、これだけは別なことわらなければならぬと思っていますのでした。編者がタイトルをつける際の問題がからむと思います。

典章三六の「禁使臣條畫」と「使臣不過三站」の兩條は性格が違ふと思います。前者は解説濟みとして、後者は次のような手続きで發せられたものです。

1 河南等路行部の問題提起（見に欽奉したる聖旨にはこうあるが、照得云云）

2 省部が回答として與えた（簡條書きの）命令（議得云云）

法律としての實效性に兩者がどのような差があったかは明らかではありませんが、立法手續きは異なると思います。後者の如きものが條畫と言われて引用されるなら問題ですが、數多くの條畫は

とんど全てが聖旨條畫に收斂されるようで、そこに私としての目安を立てているわけでありませう。

不明確な部分はない存在しますし、【参考】として斷定を避けたり、考察の際の苦惱は素直にそのまま残しておこうという當面の心算です。

なぜ聖旨條畫にこだわっているかと申しますと、これが敕・令・格に連なり、そこには必ずや明律・明令に影響を与えたものがあるに違いないと思うからです（もつとも聖旨條畫以外の所謂「格例」から継受されたものもあります^⑧）。そのための基礎調査ともなるはずだからというので、ともかく作業を開始した次第でございます。

今後とも宜しく御教導のほどお願い申し上げます。

二

以上、滋賀氏と筆者の間でかわされた往復書簡を紹介した。しかし書簡の中には、拙稿の内容をふまえて、雙方が多言を要せずに諒解していることなどがあるから、そういうところは敷衍して説明しておく必要がある。細かい参照すべき事がらについては註を附しておいた。したがってもちろん原書簡に註があるわけではない。

氏の指摘の要點は、條畫が特定の立法形式をふむ法令を意味する固有名詞ではなく、箇條書き規定を意味する普通名詞と考えるべきであり、條畫すべてが皇帝の立法すなわち聖旨條畫に直結するものではないというにある。これに對して私は自分の見解を撤回するに至っていないことを結論的には述べており、なおこの方法が條畫集成のための作業假説であることをことわっている。

私が條畫を一つの範疇としてとらえようとしている根據について、拙稿（一）と重複することになるが、参考のためにここで再説しておこう。完全な形で残っている聖旨條畫には、一定の形式上の特徴を具えた前文が附されている。その代表的なものを示せば次のようである。

。至元四年 月、欽奉聖旨。道與隨路達魯花赤・管民官・轉運司・管軍興魯官・工匠・鷹房・打捕諸色頭目人等。據制國用使司奏、……今降條畫、逐一區處于后。（典章二戸部卷八・立洞治總管府條）

。至元二十五年三月、欽奉聖旨。據尚書省奏、……乞降聖旨禁治事。准奏。所有條畫、逐一區處如后。（典章二戸部卷八・樞茶運司條畫條）

このように、聖旨條畫の發せられる對象を示したり、あるいは原案の上奏が行なわれた経緯を示すものが標準的であり、以下に一、一、と條文が列記されている。條畫というものが皇帝の權威の裏付けを有することは、『元典章』の元刊本に條畫の字が擡頭されているのをみても納得されよう。さらに條例あるいは單に條とあるものも擡頭するのを例とする。條畫制定のきつかけをなした上奏が蒙文直譯體で書かれていても、各條文は通常四字句や六字句によって構成される法律の文體で書かれている。このような形式面から觀察すると、條畫は中國的法律の範疇の内にあるもので、恐らく宋代の敕の系統を引くものと考えられる。形式上類似のものとしては、『慶元條法事類』卷三六・商稅に、隨敕申明として次のようなものがある。

淳熙伍年肆月貳拾陸日、敕。勘會、諸州軍收稅分數、自有成法、約束非不嚴備。訪聞、州縣多有違戾。今具下項。

このような書き出しで、以下に簡條書きの規定が列記される。さらに條畫は「教習蒙古文字條畫」「勸農條畫」のごとく、題名をともなつて稱されることがしばしばあるから、單に簡條書き規定というにとどまらず、ある種の法令を指示する名稱として、條畫の語は用いられたのではないだろうか。

私は元代の條畫という法令は、皇帝聖旨と一體の形式で發せられたもの、皇帝聖旨が條規を包みこんでいるもの、少なくともそれが本來的で典型的な形態と考へたいのである。ところが集成作業を進めていくと、私の與えようとする限定にふさわしくない中間の形態ともいへべきものが實際には出現してくるのである。例えば典章二・戸部卷八「新降鹽法事理」の條には、二十四條のそれぞれが相當長文の條畫がみえるが、その内容は地域ごとに細則を定めるなど、あまりにも細かい條規である。そしてこれは「あらゆる法を立て合に行なふべきの事理は、中書省に命じて條畫を定立せしめ云云」との聖旨をうけて、中書省が「聖旨の事意に欽依して、通じて參考を行なひ議立したる條畫は、後に開坐す。仰せて欽依施行せよ」という大筋の形式で發せられている。この例からすると、拙稿(一)において「中書省などの上級官廳が皇帝聖旨の意を體して下級官廳にむけて發する政令は、聖旨條畫とは別ものである」と述べたのは、限定しすぎた定義附けであつたかと考へている。簡條書き規定のすべてではないが、それが皇帝聖旨と近い關係にあるかぎりにおいては、條畫と稱された可能性もあるようである。したがつて、滋賀氏の指摘もいくらか受け容れなければならないところがあると思う。さらに次のような事例が、また私を大いに悩ませるのである。典章六臺綱卷二「廉訪司合行條例」の條にみえる簡條書き規定は、中

書省が御史臺にむけて降した割付中に、「欽奉聖旨」と聖旨を引用したのちに、「都省、今議到せる合に行なふべき事理は、仰せて依准施行せよ」として發せられたものであり、上級官廳の立法というにふさわしい印象を與える。ところが典章四朝綱卷一「省部減繁格例」第二條には、さきの條規中の一條「廉訪司官、委任既重、却不得苛細生事云云」を引用するのに、これを「立廉訪司分治條畫内一款」と稱し、しかも引用條規の末尾に「欽此」と結んでいる。ここには標題をも含めて、はからずも條畫、事理、格例、條例の語がみえるが、かといつてこれらの語が同義とは限らない。私はやはり引用の條畫を聖旨と同じように、「欽此」の語でうけることに注目したいと思う。

『元典章』の各條を一つの文書としてみると、そこには必ずや大幅な節略が重ねられているだろう。不適正な節略もあらうし、胥吏の氣まぐれすらあるかもしれない。元代の文書の作成者、編纂者にこれをただす手段がない以上、我々は面倒でもその残された文書の骨格から、文書形式や立法形式を考へるよりないのである。

つぎに、私が書簡中に豫測としてふれていた條畫の歴史的淵源に關して一言しておく。條規の語そのものは古くは六朝あたりまでさかのぼりうる。

。後違犯、嚴其誅坐。主者詳其條規、速施行。(『初學記』卷二)

三・僧第七・宋孝武帝沙汰門詔

。詔曰、……可依周・漢舊典、有罪入贖、外詳爲條規、以時奏聞。(『梁書』卷二・武帝紀天監元年四月庚午條)

このように、條規の語は詔書の末尾において當局者に對して條規の作成を命ずる場合にあらわれる。いま、元代において條畫と條規が

通じて使用されるということを前提として、元の條畫・條格を六朝の條格と同一視するのは早計に失ずるとしても、その對比を通じて、元代の條畫の位置を摸索し解明するヒントは與えられるかもしれない。私が拙稿(一)において提案した「征服王朝成立の根據の一つに、中國の實務主義を想定して」みたらどうかという問題關心に照らして、それを期待するのは過剰であろうか。しかし、このことについては別に論ずる機會をもちたい。

法制史の専門家である滋賀氏の御指摘をいただいた私は、このまま條畫集成の論考を書き進めるのは考えものかとはじめは思った。しかし、こういうことは誰かがやらねばならないことだと考えていたし、滋賀氏も集成そのものに異を唱えられたわけではもとよりないから、かえって氏の御指摘を消化して今後の集成作業に活かすべきだと思ひ直したのである。また集成作業を進行した方が該當の條文を發見するのに便宜があり、他の時代の法令との比較も行ないやすいはずだと考えている。

以上に取りあげた諸問題は、おそらく行き詰まりの議論にはならないと思う。さらなる精査、検討を通じて、將來において解決される可能性もある課題であろう。滋賀氏には、拙ない論考について有益な御指摘をいただいたばかりか、なお私がこのような一文を書くことをも快く御諒解いただいた。そのことに、私は深甚の謝意を表してやまない。このうへは博雅の御叱正、御教示を賜れば、幸これに過ぎるものはない。

註

① 「元代條畫考」(一)『香川大學教育學部研究報告』第一部第四五號・一九七八・一〇・所收)、同(二)『第四六號・一九七九・三・所收)、同(三)『第四七號・一九七九・一〇・所收)、同(四)『第四八號・掲載豫定』

② 拙稿(一)三八頁。

③ 『元典章』三五兵部卷二・拘禁僧人弓箭の條にいう。

會驗上司條畫内一款。「漢兒人、若有隱藏軍器、懸帶弓箭、即便赴官送納、仍禁圍獵等事。」

④ 一九八〇・五・同朋舍・刊行豫定。

⑤ その條畫の一條は次のようである。

各路所管州・縣、若有取會文字、立式定限怠慢者、隨即究治、並不得亂行勾攝。如須合赴府類攢文字、吏人所食・油・火・紙札、仰本管上司、於祇應錢内、斟酌從實應副。違者、仰提刑按察司、究治。

滋賀氏の指摘されたのはこの條文の中間部分であつたのである。御指摘によつてそのことを發見しえて、感謝にたえない。

⑥ いまひとつの可能性としては、「中書省奏准條畫」を省略して「中書省條畫」と稱するかもしれない。但し、もしそうだとするとこの論旨は變らない。

⑦ 拙稿(一)五〇頁。

⑧ 内藤乾吉「大明令解説」(『東洋史研究』第二卷第五號・一九三七・所收)参照。

⑨ ここまでが拙稿(一)と重複する内容である。

⑩ はじめの例は、大庭脩氏が「居延出土の詔書冊と詔書斷簡に

ついで「『東西學術研究所論叢』五二・一九六一・所收」においてあげられている。また同氏「漢代詔書の形態について」(『史泉』第二六號・一九六三・所收)においては、その例を引いて、漢代の詔書中の具令、議令文言が變化したものとされる。それは「皇帝が一部の官僚に政策の大綱、又は意志の指向をしめし、詳細な立法を委託した場合に用いられ」る形式といわれる。

(一九七九・一一・三〇)

〔追記〕

本稿脱稿ののち、滋賀氏に一讀をお願いしたところ、次のような

コメントを附載すべきものとして頂戴した。そのまま掲げさせていただく。

確定稿の校閲を求められた機会に、讀者の無用の負擔を省くために一言しておきたい。拙簡別紙一の(ロ)および二の(イ)に挙げた資料について、植松氏の反論は全く妥當であり、教示を謝する。たんなる聖旨と聖旨條畫を區別することが常に可能であろうか、そもそも區別を論ずることに本質的な意味があるだろうか、という疑問は依然として残る。疑問はそれとして、植松氏の作業が極めて有益なものであることには敬意を禁じ得ない。(滋賀)